

同時代を生きた郷土の作家 宮下正美と椋鳩十

黒姫童話館館長 北沢彰利氏

皆さん、こんにちは

ご紹介いただきました北沢と申しますが、生まれは下市田一区の羽根であります。実は高森町で話をさせていただくのは初めてなんです。それで大変緊張しまして、地元で大変お世話になった地域の先輩の方々、そして教員もやりましたので教員の先輩の皆さん、そして中学時代の同級生の皆さん、それから椋鳩十関係の記念館の皆様もお出でいただいております。大変緊張いたしております。

緊張した時にどうしたらよいかと申しましたら、私は中学時代にサッカーをやっていたのですが、サッカー部、当時は釜本が、御存知の方もいらっしゃると思うんですが、メキシコオリンピックにチームが出て、銅メダルを取って一躍有名になった時なんです。その時に高森中学校に初めてサッカー部が出来まして、私たちのクラスの半分ぐらいの男子が、ちょっと野球部を落ちこぼれたようなのが入ったんです。その時にやったことが、まず形から入ろうということで角刈りにして、ボールはとにかく前に蹴るということで、顧問の先生も熱心に指導してくださったんですが、サッカーの知識はなかったものですから、とにかく頑張れと、短パンをはいて応援をしてくださいました。

私たちも非常に頑張りました、チームが少なかったこともあって県大会まで行ったんですが、その時の南信大会でしたか、伊賀良中学校でやりまして、今の伊賀良小学校の所に伊賀良中学校があったんですが、そのグラウンドで試合になりました。当時は全員、部活動に入っているわけではありませんから、応援団が来てくれるんです。私たち選手が先に行って練習をして、応援団の人たちが毛賀の駅で降りて、そこから歩いて応援に来てくれるんですが、階段式のスタンドの所の上に応援団の女の子たちが見えた時に、私たちは非常に興奮しました。これは頑張らねばいかんということで、最初に私たちのキックオフだったんですが、松川中学とやりまして、キックオフしたセンターフォワードの彼が、思いっきりボールを蹴って、ゴールキーパーに届くくらい蹴って、ゴールキーパーが取ってそれをまた蹴り返したんですが、ここは頑張らねばいけないと思ひまして、私は走って行ってヘディングしたんですが、ヘディングが顔に当たりまして鼻血が出て、赤い鼻血がまっさらなユニフォームにポタポタ落ちまして、鼻を押さええながらずっと前半は走っていた、そういう時代でありま

した。

というわけで今日も、地元で話をさせていただくんだからということで緊張してどうしたらいいかなと思って、恰好からだなと 60 過ぎても思いまして、久しぶりに、教員を辞めてから本当に久しぶりにスーツを着てきました。暑くてしようがないのでこのあとすぐ脱ぎますが、そんなわけで今日はいろいろな関係の皆様がお出でいただいております、足りない話になるかと思いますが、1 時間ちょっとですがお付き合いいただけたらと思います。それではよろしく願いいたします。

自己紹介を少し

先ほどお話がありましたとおり、同時代を生きた郷土の作家ということで話をさせていただきたいと思いますが、ちょっと自己紹介をします。私、信濃町の黒姫童話館というところに今、行かせていただいております。黒姫童話館は信濃町の黒姫高原にございまして、これが本館で隣にギャラリーがございまして。ドイツの児童文学者で、『はてしない物語』とか『モモ』という作品を書いたミヒヤエル・エンデの作品とか、松谷みよ子さんの全作品と資料、松谷みよ子さんは野尻湖の方へ見えていて、別荘を持ってらしたということもあって、ほぼ全部、寄贈いただいております。

そして館の裏側には岩崎ちひろの山荘ということで、黒姫高原にあったものが移築されてあります。岩崎ちひろさんは童画家なんですが、そのちひろさんが絵を描かれた山荘がそっくりそのまま童話館の裏に移築されています。今ちょうど、童話館の前の草原では、コキア（箒草）が時期を迎えておまして、だんだん赤くなってきてきれいになるというところでもあります。また機会がありましたらぜひお出でいただければと思います。

私は昭和 57 年、20 代の頃、信州児童文学会という童話を書く仲間たちの会へ入れさせていただきました。はまみつをさんとか和田登さんとか、亡くなられましたが上郷におられました宮下和男先生、こういった皆さんが入っておられる会へ入れていただきまして、昭和 46 年から『とうげの旗』という、学校で注文できる童話雑誌があるんですが、それを中心に作品の発表をさせていただいております。平成 24 年に 162 号をもって終刊となりましたが、日本で一番長く続いた童話雑誌ということで、全国的にも認められていた雑誌であります。

ペンネームはいぶき彰吾というんですが、どうしてこのペンネームをつけたかといいますと、平成 9 年に『幕末の少年』という題で『信濃毎日新聞』の夕刊に連載小説として児童文学の連載をさせていただける欄がありまして、そこで 70 回ぐらいですか。毎日なんですが、その連載をさせていただいたんです。で、主人公の少年は不登校の少年、現在の不登校の少年なんですが、タイムスリップをして幕末、豊丘におられた松尾多勢子、多勢子は女性の勤王の志士で郷土の誇りでもあるのですが、その松尾多勢子の孫となって生まれ変わり、

幕末の京都へ旅をする。そして自分探しをするという物語なのですが、この連載をさせていただいた時に、不登校の少年が幕末動乱の京都でいろいろな体験をして成長して帰ってきた時に、再び学校へは行けなかったという結末なんです。自分なりにフリースクールを探してそしてその中で自分らしい学びを積み重ねていくという結末だったのですが、これを教員が書くのはまずいんじゃないかと私も思いまして、ひとりでは責任を負いきれないので、当時はヒラの教員でしたから、教頭や校長にも、あるいは教育委員会にも迷惑をかけるのではないかということがあって、いぶき彰吾というペンネームをつけたんです。これはうちの家内に大変不評でありまして、売れない演歌歌手がどっかの温泉ホテルかなんかで歌って歩くような、そういう名前だということで不評だったんですが、信州の山のいぶきと、自分の「彰」、我をあらわすということで付けさせてもらったんです。

これが『信毎』の連載の後、平成12年に『竜馬にであった少年』ということで文研出版という出版社が採ってくれまして、世に出ることができました。その時からペンネームとなりました。今は、本当は大変お世話になった教育界にご恩返しをしなければいけないと思ってもいるんですが、ずっと続けてきた児童文学の仕事を残りの人生はやりたいということで、作品を細々と書き続けているところです。『てんとくんのほしさがし』という作品とか、民話を題材にした『黒姫ものがたり』とか、こういったものを書き繋いでいるところであります。

二人の作家との出会い

さて、前置きが長くなりました。いよいよ本題に入って参りたいと思います。まず椋鳩十との出会いから。今日会場にお出でで、少年時代から大変お世話になった石原さんが、本を持ってきてくださっているんですが、『少年』という絵本、詩画集なんですが、これを26歳の時に出しました。これは自費出版でした。この本が私が初めて出させてもらった本なんですが、教え子たちが一所懸命に売ってくれまして、本屋さんでも若い者が書いたということで好意的に扱ってくれたんです。この本を出した時に椋鳩十さんを紹介して下さった方がいて、椋鳩十さんと一緒にこちらから、名古屋のデパートでやっていた原田泰治さんの原画展を見に行ったことがあるんです。車に乗って、あのころは大変緊張しまして、家の母親、そして絵を描いた画家さんと一緒にいったんですが、家の母親が「椋鳩十、椋鳩十。鳩椋十って言いそうで困るわ」って言って。一緒に行って紹介して下さって、泰治さんも鳩十さんも「一所懸命書いたね」って言うようなことを言ってくださったと思うんです。

それから宮下正美さんですが、宮下正美さんについて私が初めて知ったのは20代のころでした。私を文学的に拾ってくれたのは塩尻にいらしたはまみつをさんという児童文学者なんですが、はま先生のお宅をおたずねした時に「ちょっと待っとれ」と言って、蔵の中から2冊の本を「これはお前にあげるから」と言って渡してくれたんです。一つは『赤い鳥』

という文学雑誌の1冊でした。林芙美子とかがその本には書いていました。もう1冊が宮下正美さんの『消えた馬』でした。私は家に帰って読んで、あっ、伊那谷のことが出て来るんだなと思ってびっくりしまして、トテ馬車とか、そういった伊那谷の風景が書かれている。しかもとても面白い。こんな作品を書いた人が伊那谷の先輩にいたんだなということを初めて知って、宮下正美の名前は私の中に刻まれていったんです。

今日、宮下正美さんのお話をする時に参考にさせていただいたのが「三部作復刻版」にある山田博章さんの取材ノート、3回にわたる取材ノートですが、山田博章さんという方がいらっしやなかったら、宮下正美は童話作家として再び今の時代に甦ることはなかっただろうなと思え、本当に素晴らしいお仕事をされたなと尊敬しております。

それから宮下和男先生も椋鳩十の研究者としては有名な方ですが、少年時代を書いた『少年・椋鳩十物語』、生涯の伝記となる『野生のうた』という冊子があります。そして椋鳩十さんの二男のお子さん、椋さんのお孫さんですね、久保田里花さんという方が児童文学作家をやはりされています。その久保田里花さんが昨年、この『椋鳩十』という伝記的な本を出版されました。これも参考にさせていただきました。

それから宮下正美さんに関しては、私ども信州児童文学会の仲間で中野裕子さんという方が鼎にいらっしやるんですが、豊南短大の講師をされてますが、児童文学の評論家です。その方が宮下正美の評論を書かれ、『信毎』でも発表されております。大変、参考にさせていただきました。

それから前館長の松上清志さん、今日、お出でいただいておりますが、資料をお届けいただきました。私は松上前館長さんに薦められて「時の駅」の運営委員になったのですが、年に3回しか行事はないからと言われて。こんな役割も回ってきてしまいました。その松上先生は大変、資料を整理されていまして、参考にさせていただきました。ありがとうございます。

二人の学生時代

さて、まず椋鳩十に関しては、みなさん、よく御存じだと思うんですが、明治38年、喬木の生まれです。鹿児島県の加治木町でお亡くなりになりましたが、飯田中学校は22回生です。椋鳩十は中学の入学試験に1回落ちて、そして在学中に1回、留年するんです。学校の教員と上手くいかないこともありまして、そんなこともあって1回留年しています。そして5年制なんですが、2回目の4年生の時に卒業して東京へ出ていきます。大学進学をめざして行きます。法政大学の卒業ですが、そのあと鹿児島の方で加治木高等女学校、それから鹿児島県立図書館長等、歴任をされています。1933年に『山窩調』という小説を出しまして、これは自費出版で100部でしたが、各方面に送り、大変好評を得ております。

それから宮下正美ですが、明治34年、市田村のお生まれで4歳年上ですね。神奈川県藤沢市で最後、お亡くなりになりますが、飯田中学校の18回生であります。

慶應義塾大学を卒業して、そのあと慶應義塾の幼稚舎、湘南学園の園長等を歴任されていきます。最初の作品は昭和4年に書かれました『鏡のない国』という作品であります。椋鳩十でよく知られているのは『大造じいさんとガン』で、今も小学5年生の教科書でほとんどの教科書会社が採用しています。そして宮下正美の代表作は『山をゆく歌』と言ってよいかと思います。

少し詳しく見てまいりたいと思いますが、中学時代までですが、宮下正美はご自分の80歳の時に書かれた覚書の中で、「自分は長野県の中央アルプス、木曾山脈の山間の寒村に生まれた次男坊である。兄弟が8人もあり、次男の身分は切に頼んで中学校、当時は5年生を終わって終了すると東京に行かせてもらった」というふうにご自分で書かれています。この当時、中学へ行く、今の飯田高校ですよ、中学校へ行くこと自体が本当に珍しいことであって、多くの方は小学校を出て、あるいは高等小学校を出て、もう世に出ていくというふうであったと思うんですが、宮下正美さんは学問への志捨てがたく、こういうふうに進学の道を選んで行きました。

一方、椋鳩十は御存知のように喬木村の生まれです。南アルプス、伊那山地の麓ですね。御兄弟はお姉さんと妹さんでお父さんは元外科医です。本名は久保田彦穂と言いましたが、彦穂が生まれる頃に父は医者を辞めて牧場を経営するわけなんです、村に一つしかない牧場を人を雇って経営するわけです。そしてお父さんは絵も描かれたり、あるいは自宅に旅役者の一座を泊めたりとか、大変文化的な、経済的にも豊かな生活をされていて、従って久保田彦穂、椋鳩十への支援も厚かったと思われまます。

この時代が、明治37年には日露戦争に勝利し、そして今、話題になっています日韓で、大変、難しい問題になっておりますがその元の元、日韓併合条約が結ばれたのが明治37年、そして第一次世界大戦が大正3年となっていくわけですが、大正デモクラシーと白樺派自由主義教育隆盛の時でありまして、その影響も少なからず受けながらお二人の方は小学生時代を過ごして行かれたというふうに思われます。

そして大学進学を目指して上京して行くわけですが、宮下正美が入ったのは慶應義塾大学です。大正10年。東京大塚の寮、信陽舎で大学受験に備えるという1年間を過ごします。それで実は9月12日、つい数日前の『南信州新聞』に、この信陽舎の舎友会が総会を開いたという記事が掲載されました。「県出身の男子学生が暮らす学生寮信陽舎（東京都武蔵野市）の元寮生らで作る信陽舎舎友会の第5回総会が7日、飯田市内で開かれた。飯田・下伊那在住者をはじめ、県内外から64人が出席し、役員改選や新年度計画の案を承認」というふうに書かれています。大塚にあった信陽舎が今は武蔵野の方に移っているんですが、まだあるということなんですね。当時の長野県出身の大学を志す若者たちは、この信陽舎へとにかく入れてもらって、そしてそこを足掛かりにして大学進学を目指そうというふうの上京して行っただろうと思います。そしてその信陽舎は今も続いているということですね。

宮下正美は覚書の中で「中学校を終了するとすぐに上京した。もちろん苦学は覚悟の上だった。そして早稲田大学を避けて慶應大学に入学した。それが幸いした。父母がわずかでは

あったが学資を作ってくれたが、それも足りず、働くことによって学資を稼いだ。しかし先生と学風に合ったものか当時の5年の在学は充実していた。文筆を志すにもってこいの環境だったし、書くものが多方面で活用された。学生時代から書くことによって学費を得ることを知った。」と書いています。学生時代から宮下正美はもう、書くことによって収入を得ていたのです。これは次にまたお話ししたいと思います。

一方、椋鳩十は法政大学に入るわけですが、東京へ出て早稲田高等予備校へ入るんですが、ちょうど家へ帰ってきていた時に、9月1日の関東大震災があったんですね。東京へ帰って予備校生活を続けることは出来ないだろうということで、京都出町の予備校に通うようになります。これはやはり椋鳩十の家が、家計が非常に恵まれていたということだと思いがすが。

そうして大学へ入学してからは詩人として出発して佐藤惣之助「詩之家」同人となります。詩集『駿馬』を100部だけ久保田彦穂の名前で自費出版をします。

27年に父の金太郎が亡くなります。で、第二詩集『夕の花園』を出版し、29年には友人・赤堀作一の妹、みと子と学生結婚をします。静岡の方ですが、当時、椋鳩十は「肩までの長髪に、赤いトルコ帽をかぶり、ロシア風の上着・ルバシカに、赤いステッキを携えた彦穂は、モダンボーイといわれる当時の流行最先端のファッションです」と、これはお孫さんの里花さんが伝記の中で書かれています。この赤いステッキなんかを贈ったのはお父さんなんだそうです。お父さんも椋鳩十が詩人として活躍するのを大変喜んで、自分も芸術家肌でしたから、応援をするために赤いステッキだとかを贈ったってことなんですね。

それぞれの師、河竹繁俊と佐藤惣之助

さて、その学生時代に、二人の作家はそれぞれ師となる方と出会います。宮下正美と河竹繁俊ですが、宮下正美は信陽舎の先輩・中島賢二郎の紹介で、その親戚に当たる飯田中学出身の演劇学者・河竹繁俊に会うということなんです。この河竹繁俊という方は山本のご出身の方であります。飯田中学出身なんです。坪内逍遙の文芸協会の演劇研究所に入って、俳優演出助手を始められ、そして坪内逍遙の推薦で河竹黙阿弥の娘、糸女の養子となるということで名字が河竹になるわけですが、のちに演劇博物館長等を務めながら演劇史の研究をされた方です。この実のお兄さんが市村威人ですね。地方史家としては、地方史をやられている方々で知らない方はいらっしゃらないお名前ですね。そして下伊那の市町村史は必ず市村威人さんの研究をもとにして村史、町史、市史を組んでいるわけなんです。その市村威人さんの弟さんということになります。

宮下正美さんは深川にあった河竹宅に足繁く通うようになり、『黙阿弥全集』の編集をしていた河竹の原稿清書などを手伝い、学費を貯めました。手伝うことによって、書くことによってまずお金を得て、それを学費に代えていく。河竹家では田舎出の後輩苦学生を温かく

迎え入れ、時には夫人が衣類の洗濯までしてくれたそうです。郷土から東京へ出てきた青年たちをこうやって面倒を見て行った先輩がいて、その中で宮下正美も育っていったということだと思えます。

一方、椋鳩十は佐藤惣之助という方と出会います。法政大学に入学した椋鳩十は中学時代に読んだ『レ・ミゼラブル(ああ無情)』の翻訳者・豊島与志雄教授らの講義に胸を躍らせ、文学への志を確かなものとし、学生仲間から佐藤惣之助の「詩之家」、これは同人誌ですが、を紹介され、川崎の佐藤の家を訪ねます。この佐藤惣之助という方はどういう方かと言うと、川崎市の生まれで、佐藤紅緑という方がいるんですが、この方に師事をして俳句を学びました。佐藤紅緑の弟子ですね。そして詩集なんかを出していくわけですが、最初の奥様がお亡くなりになられて、その次に詩人・萩原朔太郎の妹さん、萩原愛子さんと再婚をされるわけです。その後、これは戦後になって行きますが、作曲家・古賀政男と組み多くの楽曲を世に送り出してまいります。代表作に「人生の並木路」「人生劇場」。こういった曲に詞を書かれた佐藤惣之助さんという方ですが、戦前に亡くなられてしまいます。この佐藤惣之助のところを椋鳩十は訪ねるわけですが、その時に佐藤惣之助が、「久保田君(椋鳩十の本名ですが)、この号に載った『駿馬』はいい。こんなのが三、四十編もできれば、立派な君の詩集になるよ」ということで褒めてくれるわけです。これは大正15年に出されたわけですが、学生時代ですが、自費出版で序文、最初の紹介文のところは佐藤惣之助が書いています。

どんな詩だったかと言いますと、こんな詩であります。

「栗毛の馬／ 彼奴の立派なしりっぺただ。／あひふの下には／駿馬の鋭い感覚がひそんでいる。／雪をきちきちふんでいるひづめは／蟹の目の様に冷い。／ぷりん　ぷりん　と体をふる度にゆれる／その尻尾は／北風の様にあざやかに空気をきる。／その体格でひとはね　はねてみろよ！／どんなに美しい空想が爆発するだろう。／ああアラビア人よ！／お前等の祖先の持つ物語は／砂漠から生まれたのではない／彼奴らの背中から黒ん坊の様に生れ出たのだ。」というこの『駿馬』という詩なのですが、いかがでしょうか。ちょっとなかなか、今の時代の我々にはこれが果たして良い詩なのかどうか受け止めづらいですよ。でも当時はこの詩が佐藤惣之助、「人生の並木路」を書くような立派な詩人によって、賞賛されていたということです。

共に影響を受けた米の作家ジャック・ロンドン

さてこうした大学時代に二人が共に若くして影響を受けたアメリカの作家がいます。ジャック・ロンドンというこの方ですが、明治9年から大正5年の生涯、そして若くして亡くなられたんですが動物物語を多く書きます。アラスカや南洋諸島を放浪してカリフォルニア大学に入学したが、学資は自分で稼いだ。アラスカのゴールドラッシュに加わり、これが

作家としての契機となります。28歳の時に『野生の叫び』で認められ、以後、人気作家となって20年間に多数の作品を発表しましたが、41歳で自ら命を絶ちます。代表作は『野生の叫び』『白い牙』です。このアメリカの作家について宮下正美はこのように書いています。『愛馬北風きたかぜ物語』を31歳の時に出すわけですが、「奇しき運命の元に生まれた名馬の子が様々な経過を辿り、一生を終えるまでの物語を、ジャック・ロンドンを真似て伝記的に筆にした小説である」と。だから宮下正美さんは、たくさんの動物物語を書きますが、その元にしたのがジャック・ロンドンというアメリカの作家の書き方であった、ということです。

一方、椋鳩十については宮下和男さんの『野生のうた』の中にこういうところが出てきます。

大学を出てから教員としての就職先がないものですから、姉が呼んでくれた鹿児島の子島の小学校の教員になっていくわけですが、その種子島について、「種子島か、悪くないなあ。姉の清志から来た手紙を読み終わった彦穂は、あおむけに寝ころんだまま、天井を見つめていた。…彦穂がジャック・ロンドンの小説を読みあさったのは、おもに予備校に通っていた浪人中であった。」と。

ですので、お二人とも若い時にジャック・ロンドンという作家に非常に影響を受けて、動物物語についての関心を高めていったということが言えるだろうというふうに思います。

デビュー作

そして作家としてのデビューになっていくわけですが、宮下正美は『鏡のない国』、この本ですが、で作家としてデビューしていきます。宮下正美の『鏡のない国』は、1929年、昭和4年、28歳の時の作品です。

そうして椋鳩十のデビュー作は、100部作った自費出版の『山窩調』であります。

『鏡のない国』という本は、そこに現物があるのでご興味があったら広げていただくとよいと思いますが、短編集です。童話の短編集。表題となっております『鏡のない国』というのは、『裸の王様』という童話がありますがあれにとっても似ていて、この国には鏡がまだなくて、鏡を見た人がいない。そこへ商人が鏡を持って売りに来るわけなんです、そこで門番が鏡を見て、こんないかつい男が俺を睨んでいる。そして家臣がそれを見て、なんか狡そうな男が自分を睨んでいる。王様が鏡を見て、なんだかぶくぶくしている奴が俺を見ている、ということで、自分の姿を鏡で初めて見て、それぞれびっくりしてというような話です。これは鏡なんだよ、同じなんだよと言うのはやはり子どもなんです、これは演劇の脚本の形式になっています。

この本は大変、立派ですよ。文録社というところが今でもありますが、教員関係の事務書、教務手帳とか、教員がいつも手元に置いて授業の計画を書き込んだり、教育基本法をち

よっと見返したりするような、そういう冊子を作っている堅い会社です。そこから宮下正美の最初の作品は出て行きます。

一方、椋鳩十の『山窩調』というのは、これは皆さん、よく御存じだと思いますが、山窩という山の民を主人公とした物語です。自由に生きる、束縛されずに自由に生きる山の民を描いた作品です。『山窩調』を出す時に椋鳩十は、初めて椋鳩十というペンネームをつけます。椋というのは当時、今もそうですが木地師の方は小椋姓が多かったんですね。小椋の椋を取って椋、野外に鳩が来ていたから鳩、そして十、椋と鳩が鳥ですので、やはりさかさまにしやすく家の母も心配したのですが、『椋鳩十全集』の出版記念会に行った時に、出版社の社長さんが万歳をする時「鳩椋十、万歳」と叫びましたから、やはり間違いやすいんですね。みんな笑わなかったんですが、『山窩調』でこのペンネーが初めてつけられました。これは出版社とか有名な文学者のところへ送るんですが、大絶賛でした。吉川英治、川端康成に絶賛されて、『東京日日新聞』をはじめ、新聞・雑誌からの原稿依頼が殺到します。

戦中の児童文学の興隆と二人の活躍

こうして二人はデビューをして、宮下正美さんは『旅で見た動物の生活』とか『旅で見た動物の生活続』だとか、『愛馬きたかぜ物語』、『愛犬パック物語』、そして『山をゆく歌』の元になっています『二少年の冒険』『莊介の冒険』、これを戦前、昭和17年ごろにかけて書いて出版していくわけなんです。これだけではないですが、本当にたくさんの本を出版していきます。

一方、椋鳩十は『山窩調』で一躍、時の人になっていくわけなんです。その昭和8年に続けて山窩の物語である『鷺の唄』というのを出版するんですが、これが発売1週間で発禁処分を受けます。なぜ発禁処分を受けるかなんですが、当時の世相というのは、本当に私よりご存知の方が多いかと思うのですが、戦前、昭和12年には近衛文麿内閣が誕生して、3回、近衛文麿は総理として内閣を組閣していくわけなんです。実は近衛文麿という人は公家の出身なんですね。軍人内閣から公家出身の文人内閣へ移っていく。この時代というのは、実は児童文学に関しては黄金期なんです。数々の本が出版されてる。それは近衛文麿っていう人が非常に文化を大事にする人であって、その近衛さんを首相にして日本の文化を花開かせていきたいという願いが近衛文麿の下に集まり、近衛文麿もその願いを受け入れて自由主義者はもちろん、社会主義者、あるいは共産主義者まで近衛文麿は交友を重ねて自分のブレーンにしていくわけなんです。

そのなかに『路傍の石』を書いた山本有三という方もいます。この山本有三などが中心となって、子どもたちに本当に芸術性の高い作品を届けて行こうという活動を展開していき、それを時の政府も後押ししていくわけなんです。そのなかで生まれてきたのが『君たちはどう生きるか』という、ベストセラーになった吉野源三郎ですね。あれが『少国民文庫』の最

終巻の1冊として出されました。というように、当時は戦争にももちろん向かっていくのですが、文化的には子どもたちに芸術性の高い作品を届けて行こうという文化活動がずっと起こっていて、その中には大変たくさん知識人が参画して行きます。小川未明なんかも本当に急先鋒になって協力していく、という時代であったようです。

ですから誰かが「さあ、戦争だ」といって旗を振って「さあ、行け」というように進めていったわけではなくて、本当に文化活動をみんなで盛り上げて行こう、新しい時代の日本を作って行こう、それが近衛文麿という新しい首相によって実現するんだと信じたのでしょう。近衛が第一次内閣を組閣したのは45歳の時ですね。45歳の首相というのは当時、最年少だったと思うのですが、新聞には毎回、近衛文麿への期待が、記事がどんどんどんどん出されていくという時代であったんです。

そして昭和13年に国家総動員法が出されるんですが、これは日中戦争が始まっていったりすることによるわけなんです、その時に「児童読物改善ニ関スル指示要綱」が出されます。これは小川未明なんか中心になって、文化人が原案を作って、そして出版社を呼んで、こういうふうに見る児童読物をしていこうじゃないかということを書いていくんですが、その「児童読物改善ニ関スル指示要綱」というのは文学表現に関する統制、実はそうではないんですね。活字は読みやすいものにしないではいけなとか、俗悪な表現をしてはいけなとか。

当時、子ども向けには赤本というペラペラの紙の雑誌やなにかで、子どもの表面的な興味を引くような作品が結構、出ていたので、そういう作品はだめだと。それから驚くべきことに、子どもたちが簡単に戦意を高めるような、そういう作品もだめだと。実際に発禁処分を受けている中には戦記物もあったんです。懸賞もだめ、子どもたちの興味を懸賞で煽るのはだめだと。だから必要以上の懸賞や附録をつけるのはだめだという指示もあったんです。そしてその最後には、日中戦争がもう始まっている時なんです、「事変記事（これは支那事変ですが）の扱い方は単に戦争美談のみならず、例えば支那の子供は如何なる遊びをするか、支那の子供は如何なるおやつを食べるか等、支那の子供の生活に関するもの、または支那の風物に関するもの等、子供の関心の対象となるべきものを取り上げ、子供に支那に関する知識を与え、以て日支の提携を積極的に強調するよう取り計らうこと。従って皇軍の勇猛果敢なることを強調するのあまり、支那兵を非常識に戯画化し、あるいは敵愾心を煽ることはいけない」というのが最後に書かれています。ですから戦争に向かっていた時代に出された「児童読物改善ニ関スル指示要綱」には、一項目も、自由主義教育はよくないとか共産主義化はよくないとか、そういった文言は書かれていないんです。

ところがあとからこれは各出版物に関する検閲、それから発禁処分として使われていくわけなんです。だから非常に時代の難しさというのを考えざるを得ないなと。どんなに良い法案に見えても、それを利用する人にとっては、やはり発禁できるということが書いてあれば理由をつけて発禁にしていくというような扱われ方をするのではないかなと思います。

そして椋鳩十の『鷺の唄』は1週間後に発禁処分を受けるのですが、この作品が発禁処分

を受けたのは、ひとつは「山の民の自由」という言葉を使ったこと、伏字ですから■が出てくるわけですが、たとえば、「あの野郎はそれを■■■■」という何文字かが伏字になってしまうのですが、この伏字の部分は「おおっぴらに自由にして」という自由という言葉が入ってきているので、伏字となっています。それからもうひとつ、「あの野郎の■■■■うっつりと目を閉じて」。この伏字の部分は「膝の上で野郎の愛撫を受けて」となります。つまり、官能的な表現が発禁処分されたんです。自由という言葉が入ってくると官能的な言葉が入ってくる、というところは、まあ自由というのは国の統制から外れていくようなことはよくないということなんでしょうが、官能的な部分はそれこそ児童読み物では無いですが、民心を乱すような表現は良くないということで、『鷺の唄』は発禁処分を受けていくわけなんです。

戦意高揚の創作とは距離を置いた二人

そのあと椋鳩十は大変苦勞するんですが、時の講談社、大日本雄弁会の講談社が「少年倶楽部」という本を出していたんですが、そこに須藤憲三という名編集長がいて、その須藤憲三さんが窮地にある椋鳩十のところに、怠け賃だといって作品も書かないのに100円を送ってくれるということがありました。椋鳩十はその当時、お母さんが病に倒れて、お母さんは助産婦、看護師さんだったんですが病に倒れて妹さんが看っていたんですが、妹さんがペルーの方と結婚してペルーに行かなくてはならなくなります。そこで、椋鳩十はお母さんを鹿児島へ引き取って一緒に暮らすんですが、熱病に倒れて、続いて椋鳩十も、みと子夫人も子どもたちも熱病に倒れます。治療費がかさみ借金が70円位たまっていきます。そういう時に、須藤憲三さんから、須藤憲三さんは『鷺の唄』が出たときに「あなた、子どもたちの作品が書けるはずだからぜひ書いて下さい」と言って依頼をするんですが、椋鳩十はその願いになかなか応えることが出来なかったんですが、その窮地にある時に100円の怠け賃を貰って奮起をして、そして『少年倶楽部』という雑誌に『金色の足あと』『かたあしの母すずめ』そして『大造じいさんとガン』を昭和16年に発表していくわけなんです。ほぼ、隔月で発表していったといいますから、凄い執筆量ですよ。そして『月の輪熊』が昭和17年という具合に昭和18年ごろまでは作品が出ていくわけなんです。

それは、やはり土壌として児童文学を時代が大事にする、社会が大事にするという後押しがあったために、児童文学関係の出版物へは紙も優先的に回されてきて、戦中であってもしっかりと本が出されていくという時代背景があったらというふうに思います。

ついでに申せば、近衛文麿は一高から東大を出ているんですが、当時の同級生が『路傍の石』の山本有造、そして土屋文明とか椋鳩十の法政大学の時の教授ですね、椋を大切にしてくれた豊島与志雄、それから芥川龍之介、菊池寛といったようなそうそうたるメンバーなんです。このそうそうたるメンバーが近衛文麿と同期で、そして近衛文麿の文化活動のプレー

ンになっていった、文学的な面では、という時代であった、ということです。

ではここで宮下正美は戦意高揚の作品を書かなかったのかと。書かなかったですね。私の調べた限りでは戦争に協力する作品というのは書かなかったです。宮下正美はなぜ書かなかったかという、いろいろあるでしょうが、この出版社関係は堅い出版社なんです。宮下正美自身が慶應大学の幼稚舎の、まあ付属小学校の教員でしたから。戦争に協力するようなものを書いていたのは『少年倶楽部』とか『幼年倶楽部』。講談社ですから、その関係のところから一步離れていて、そしてそこから戦意高揚作品の原稿依頼というのはなかったのではないかと思いますし、また、宮下正美の思いもあったのかもしれませんが。

椋鳩十も児童文学者の中では戦意高揚作品は書かなかったということで、非常に稀な作家であるという評価があります。ただ、この前、椋鳩十記念館の夏季講座でお話をさせていただいたんですが、椋鳩十は昭和19年の1月号の『幼年倶楽部』に、「軍神に続く横山少年団」というルポルタージュを久保田彦穂の名前で書いています。これは真珠湾攻撃の時に亡くなった9人の方を軍神にして、一斉に太平洋戦争の時の戦意高揚として宣伝したんですが、これには北原白秋も書いていますし、小川未明も書いています。その中で椋鳩十も実名久保田彦穂で書いているのです。それは椋鳩十が、同人誌の仲間が治安維持法で捕まって、自分自身も特高警察からあとを追われていたりとか、それから軍神横山少佐が鹿児島出身の方であったりとか、講談社からその出版企画が持ち込まれたということもあたりして、書いたんだろうと思いますが、ただ書き方は戦意高揚の作品そのものでした。少年が最後にお母さんに言うんですが、少年は飛行兵を志願して兵学校に行くんですが、「お母さん、この次は靖国神社に連れてこれるよ」とお母さんに言う場面で終わりになります。靖国神社というのは少年飛行兵が特攻となって亡くなった時に神社に祀られるから、お母さんは神社で僕に会えるということだと思んですが、そういう作品を椋鳩十はルポルタージュで、本名で書いておりました。これは非常に複雑な事情、思い、そして社会の動きというものの恐ろしさがあるのではないかと思います。

今も非常に難しい時代に入ってきていますので、私たちが学ぶことは多いかなというふうに思います。

戦後へと続く活躍

さて、戦後の作品ですが、本当にたくさん作品を書いています。宮下正美は『トケイノハナシ』とか、これは科学物ですよ、『音の話』もそうですね。それから『山をゆく歌』の元となっている『文太と荘介の冒険』なんかも、それから伝記物、そして『しつけの鍵 あなたもよいお母さんになれる』等のしつけ教育本。そうして『山をゆく歌』が出ていくのが昭和33年です。三部作『消えた馬』『ふうちんと山犬』と続いていくわけですが、この東都書房というのは講談社から分かれた出版社ですね。その中で本当に良い作品を届けて行

こうということで新田次郎とかそういう人たちも書いているところです。それから『理科なぜ?なぜかな』『少年少女全集 伝記と美しいお話』というような、生涯で138作品を宮下正美は書いています。

一方、椋鳩十は児童文学がほとんどでした。昭和22年、戦後まもないころに、『動物の不思議』『片耳の大鹿』というふうを書いていき、そして『マヤの一生』、反戦児童文学として名高い『マヤの一生』が書かれたのは昭和45年です。ご自分のお子さんのことを含めて書かれた『モモちゃんとあかね』が昭和46年。そうして昭和62年『命ということ心ということ』というエッセー集、随筆集のような作品、生涯に200冊の出版をしております。

その中で、宮下正美作品に童話、本当に童話というのはそう多くはなかったと思います。『鏡のない国』から始まって『世界を旅した動物の話』のように、それからこれは『消えた馬』の当時のものですね。『二少年の冒険』という童話、それから『伝記お話し絵本』というのも書いております。外国の方の伝記もワシントンを始め、書いていますが、福沢諭吉はもちろん慶應の創始者として書いております。それから本当に子ども向けのお話『十二か月』というようなシリーズ、そしてここに絵本があります。絵本は『のっぽ・のっぽのきりんさん』という今風の絵本ですが、その絵本も書かれております。

そして自然科学、社会科学書も本当にたくさん書かれていて、『なぜなぜ事典』だとか、こういったたくさんの自然科学や社会科学の本も書かれております。そして教育、子育て、啓蒙書も大変多いです。当時としては教育書だとかしつけの本というのは宮下正美さんが一番書かれていたのではないかというふうに思います。今でいう教育評論家の尾木直樹さん尾木ママと同じように有名だったのではないかというふうに思います。

一方、椋鳩十は今も新装版が出ています。当時の作品が新しい装いを持って、新しい絵を持って出てきています。『大造じいさんとガン』とかはもちろんですが、『母ぐま子ぐま』、こういったものが絵本になって出てきています。子どもたちに好まれる簡潔な文章、古くならない動物の世界、母と子の愛とか生きることの尊さ、人間と動物の境を越えた畏敬の念等、永遠のテーマを扱っているということが椋作品が今に生きていく要因ではないかと思えます。

全国学力テストというテストが今、日本で定着していますが、第一回目の時に『大造じいさんとガン』そして『母ぐま子ぐま』が資料として問題文になりました。それは『大造じいさんとガン』が大手5社の5年生の教科書すべてに載ったということで、質の面からも椋鳩十の作品は全国学力テストにふさわしい作品とされたのでしょう。もっとも、椋鳩十は全国学力テストに自分の作品が取り上げられることは多分、嫌だとおっしゃるだろうと思いますが。

二人の作家に共通するもの

作家、宮下正美と椋鳩十に共通するものですが、一つは故郷伊那谷ですね。伊那谷の自然と純朴な人々を基盤とした文学。自然の豊かさ厳しさの中で、自分の人間性、他人の人間性を大事にしながら育ってきていること、それからジャック・ロンドンに強い影響を受けた動物児童文学を確立したこと。また、椋鳩十は祖母からいろりを囲み、いろいろな話を聞かせてもらったということをエッセーの中で何回も書いています。語りの文学である。それから宮下正美も慶應義塾の小学校で教壇に立ちながら、都会の子供たちに田舎の自然と冒険の生活を臨場感たっぷりに語り聞かせたと言います。二人の作家には、語りの文学、これが基盤になっています。

それから教育者と作家をお二人とも両立させていったということ。さらに、子どもたち、親への読書運動、生き方への啓蒙活動をお二人ともされたということ、そして講演の多さ、お二人とも大変、講演が多かったですね。宮下正美さんの講演回数は覚書によれば1万回を越えています。私はこれを覚書からメモっておいて、家でもう一度資料を作っている時に1万はないだろうなと思って、もう一度資料館へ確かめに来たんです。そうしたらやはり1万回を超えていました。これは80歳の時だったと思いますが1万何回と書いてありました。実際に宮下正美さんはご自分で書かれて整理されたんですが、それだけの回数の講演をされたと思います。1年間に200回の講演をしたとして、1万回を超えるには50年やらないといけませんよね。多分やられたと思います。

それだけ話をされることに躊躇がなかった。多くの方にお話しされるのがどちらかというと宮下正美さんは、なんというか、好んでおられたとか、そういう方ではないかと思えます。そして一方、椋鳩十さんも講演はたくさんこなしておられましたね。飯田・下伊那でも本当に多くの学校、そして公民館、そういった活動、そして図書館関係の講演会など本当によく回っておられてお話をされています。お二人ともこういう講演を多くされていた作家です。作家というのは内に籠りやすい部分を持っていますから、そういう面では珍しいとか、稀な作家のお二人であったと思います。

動物物語で言えば『山をゆく歌』には、読まれた方はご存知だと思いますが、二人の兄弟が子グマを連れてきちゃうんですが、母グマはそれを追ってきますよね。枝へ登ってきて兄弟も危ないっていう時に枝が折れて熊は谷底へ落ちていくわけですが、こんなところがあります。

「連れ去られた子グマを追ってきた母グマは木の枝にはじかれ谷底に落ちる。その母グマが山犬に襲われて木に登り、逃げた兄弟を救う。足もとにからだをこすりつける二ひきの子どもをながめる大グマの目は、さっきのあのはげしさを忘れた、母の目、母のすがたであった」というふうに書かれております。『山をゆく歌』の中の一場面です。その元となった『二少年の冒険』は昭和15年です。そして椋鳩十の「母ぐま子ぐま」、『山の太郎熊』とか

『月の輪グマ』にこの親子の熊の話が出て来るんですが、その中にやはり母グマが猟犬と闘って、子グマを守るんですが、「クヌギの木から下りた子グマが鼻を鳴らしました。するとお母さんグマは子グマに近づいてその頭をぺろぺろなめてあげました」というふうに、子どもを救うために激しく闘う母グマと、そして最後に子グマをやさしく迎える母グマというその展開と表現というのはお二人に共通のものだなあと私は思います。

これはジャック・ロンドンの影響だとか、あるいは実際に郷土の中での体験とかいうことがあるのではないかと思います。

二人の作家に交流はあったのか

さて、それで、このお二人の作家に交流はあったのだろうかということが私も一番、関心があって調べて来たんですが、文献の中ではお二人が交流があったということは出てきませんでした、残念ながら。同時代を生きて、同じ伊那谷という郷土から出て、しかもジャック・ロンドンというアメリカの作家に大変大きな影響を受けている二人が、お互いを知らなかったということはないんじゃないかと思っていました。しかし、一つは地理的に東京と鹿児島という遠さがあること、それから宮下正美さんは日本児童文芸家協会から表彰を受けていますが、椋鳩十さんは日本児童文学者協会というちょっと進歩的なとか、そういう児童文学者協会、宮下正美さんは会には入っていなかったけれども児童文学者協会というちょっと保守的な協会に近い方であったということ。よって立つ児童文学界の基盤の違いがあったのではないかということ。それから出版社が同時代的に重なるということではなかったんですね。講談社の関係の子会社ということはあったんだけど、同じ出版社で同じ時期に本を出版されたということではなかった、というようなことがあるのかなと思うんです。

それでも諦めきれずにお孫さんの久保田里花さんに、久保田里花さんは今日お見えの大原館長さんの時に椋鳩十記念館の講演にみえたんですが、その関係で私、お電話をして、椋鳩十おじいさんが宮下正美という名前を口にされたことはありますかということをお聞きしたんです。「私は聞いたことがないんですが」というのが一回目の電話だったんですが、そのあと電話をいただいたんです。椋鳩十の書齋、椋鳩十が座る椅子の真後ろに一番大事にしていた書棚があったのですが、「この書棚の本だけは、里花、どんな本を持って行ってもよいけれども、必ず元あった場所に返してくれ」ということをお孫さんである里花さんに椋鳩十は言ったそうです。そして里花さんのお話ですが、祖父が大切にしていた書齋の書棚、ちょうど祖父が座る真後ろに宮下正美『旅で見た動物の生活』と、ジャック・ロンドンの『白い牙』が並んで入れられていました、と。ジャック・ロンドンの『白い牙』は小学館の全集の一冊が入っていたそうですが、ですから椋鳩十は宮下正美のことをもちろん知っていた、そして宮下正美の本を大事にしていた、自分の真後ろの書棚に、絶対にここにあるべき、置

くべき本である、そしてその隣にはお二人が影響を受けた『白い牙』が並んで置かれていた、ということを知り、久保田里花さんが調べて連絡してくださったんです。

だからお互いの文学活動というのを知っていたし、そのことに対してお互いに尊敬の念を持っていて、同じ郷土から出て頑張っている児童文学者であるということも励みとしていたと思います。またそのお電話の中で、「なぜか、『慶應義塾百年史』という本が書棚に置いてありました。他の大学の本は一切、置いてなかったけれども『慶應義塾百年史』、だけが。」と不思議そうに話されました。慶應義塾は宮下正美が本当に長く在籍した学校なんですけど、『百年史』が出されたのは1958年です。その本も一緒に置かれていたということでもあります。

大変、駆け足になりましたが、郷土から出た宮下正美と椋鳩十という偉大な作家は、同じ時代を懸命に文学活動をし、教育者として歩み、戦後もいろいろな面で活躍をされ、お互いに敬愛の念を持って接しておられたのではないかとこのように拝察するわけです。

大変失礼をしました。まとまらない話でしたが、吉田博章さんが大切に取上げていただいた宮下正美という作家が、高森町、伊那谷、そしてこれからも全国で、私たちの郷土が誇る文学作家として、椋鳩十と同じように愛され続けていくことを皆様と一緒に祈りしてお話を終えたいと思います。ありがとうございました。

